

## 私の中の京都

チャン・ティ・ツック・リン

人は、実際に行ったことのない都市を愛することができるだろうか？私はできると思う。なぜなら、愛という感情はあるものをよく理解してから生まれるだけではなく、強く知りたいという意欲から生まれるからだ。昔の人なら、実際に行くか、本かそれとも他人の話でしか、自分の故郷以外の場所を知り、愛することができないだろう。そんな中でも蒸気機関車や飛行機などの交通機関を作った我が人間の祖先はきっと、ずっと昔から遠い場所に憧れ、愛しく想えたからだと思はれる。私だって、このエッセイを書いている今このときまで、行ったことのない日本の古都、京都を愛おしく想っている。

私の国、ベトナムは古い歴史があるのに、外国人の印象に残るベトナムのものは、フォーやアオザイ等、歴史の浅いものぐらいだ。植民地時代が、我が国の文化に大きな影響を残したからだ。ガイドの仕事をするとき、なんで外国人が作った建物ばかり解説しなければならないんだという違和感を抱かずにはいられなかった。直視しづらい事実だから、私は無意識に祖国と似た伝統文化のある国に惹かれた。ニュースでベトナムは日本から様々な場面での援助を受けていたという情報をよく見かけた。日本への感謝の気持ちがいっぱい、その他日本の情報も沢山見てきたから、日本への興味を持ち始めた。そして、多彩で独特なその文化を知ろうと努力し、日本の古都である京都の固有な文化に夢中になり、知らないうちに、「目を背ける」ではなく、「単純に好きだから知りたい」となった。

初めて見たのは京友禅の動画である。その後、西陣織や京鹿の子絞り、京扇子等京都の伝統工芸の卓越した技術を見て受けた感動は今までも新鮮に覚えている。動画に飽きた頃には、本が大好きな私は、本にある京都を探した。初めて読んだ京都を舞台にした小説は『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のことを教えてくれた』だった。作品では難しい学問である哲学を丁寧にわかりやすく解説された他に、京都の風景も鮮やかに描かれていた。読んだとき、脳裏に何度も主人公と哲学の道を歩いたり、宵山に賑わった四条通りで祇園囃子の音が聞こえたり、五山の送り火で大文字を点火する崇高な瞬間に感嘆したりするのを想像してみた。読んだ後も、桜のピンク色に染まる哲学の道の写真に見惚れた。人で賑わっている祇園祭を巡ったり、大文字山の炭拾いに行ったりしたくなった。それ以降、本のあらすじに「京都を舞台に」というフレーズがあれば手に入れたくなるのだ。

後に読んだのは『京都寺町ホームズ』という作品である。ねじりまんぼを潜り、南禅寺の五鳳楼から歌舞伎での石川五右衛門が愛でた絶景をひたすら想像してみた。あるときは、源氏物語の桐壺更衣が行き来した淑景舎から清涼殿までの渡り廊下を歩きたいと勝手に思い、調べると住宅街になったのを知り、勝手にガッカリしたりした経験もある。私はこうして、日本人の職人の技術と小説家が綴った言葉を通して、京都という都市を知り、好きになったのだ。小説の中には、時々イラストがあるものの、大部分は文字と空白だから、表現は映画や漫画のように一々固定されていない。読者はある程度自分が好きなように想像することができる。これで、自分の中の京都が成り立ったとも言える。それとともに、自分の中にある本物の京都を味わいたいという願望が次第に大きくなってきた。

好きなアニメのキャラクターはこう言った「別の場所に少しでも憧れを持ってしまえば、辛くなるから」。わからなくもない。自分が想像し、心の中にその場所を作り上げたから、本物は思い通りか想像以上でないと、失望の淵に追いやられてしまう。私は、それ程愛おしく想ってきた京都に実際に長居すると、気付きたくないことまで気付き、飽きるのか。よそ者である外国人の私は冷たくされるのか。そのような時が来ると自分は初心を忘れるのか。でも、悩んで考え抜いた結果、答えは一つだ。例えば京都に住んだ後、私は梶井基次郎が執筆した『檸檬』の「私」と同じく、京都ではない町へ逃げたいときが来ても、今までの想いは変わらないと思う。なぜなら、今まで獲得していた京都への文化知識や感情は不完全ながらも、心の中の京都を作りあげ、自分とい

う人間を作ったからだ。捨てたくても捨てきれない大切な自分のその一部を大事にしたい。未来の自分が後悔しても、好きなものをどんなに憎くなくても、好きになって得た今の自分が本物だという事実は変わらない。然し、どうしても祖国の文化の亀裂を忘れることができなかった。

近年、ベトナムの若者が伝統復活に励んでいる姿を見て、自分も力になりたいと思い、ずっと他の文化に目を向けていた私も祖国の文化のために何ができるか考えた。京都人の作家たちや職人たち、すなわち日本人はひたすらに努力し、自分の仕事に成功することで、どこにもない個性豊かな文化を創り、保存してきた。それにとどまらず、西陣織のマスク等現代社会に求められるようなものも常に創り出している。世界に叫ばなくても、自然に人の目に留まり、文化がこれで世界に広げられる。その努力、創造力の高さ、巧妙さ、文化への愛情は外国人の私の胸に響いた。だからその意識、その精神から学び、祖国の文化を復旧し、保存すれば良いと私は思う。実際に、日本はベトナムの文化保存を色々助けてきた。具体的には2010年から「タンロン城遺跡」を対象に、ユネスコの日本信託基金を通じて文化遺産保存支援事業が始まった。その他にも日本国際協力機構から「ミーソン遺跡」などの修復事業への支援を受けた。私も、いつか京都の職人や作家たちのように、色々恩恵を受けてきた日本に、世界に、祖国の文化を届けたいと考えている。そして、大好きな京都の良さを母国の人と世界に伝えたい。そのため、長年秘めていた遠くへ行きたいという意欲と母国の伝統文化を復活したいという思いに向き合い、自分にとって清水の舞台から飛び降りるような決断を下し、日本に留学することを決めたのだ。